

【講演9】加曽利E系列の土器群（続） －加曽利E式の堀之内式への継承－

稲村晃嗣

はじめに

加曽利E式を継ぐ土器は、称名寺式と一般にはいわれる。それに一考する機会を設けたいというのが本論の目的である。1985年における称名寺式土器に関する交流研究会では、稲村は称名寺式が成立することによって現れた加曽利E式に見られる変化を述べた（稲村1990）。石井寛氏は、その土器群に対し、便宜的にとしながらも、加曽利E V式という呼称方法を提案した（1992）。今回の発表の中では、近年縄文時代中期末・後期初頭の土器群を論じた論考の中に加曽利E V式（加曽利E 5式）の型式名を使用する研究者も一定数存在することから混乱を避け、便宜的にはあるが加曽利E V式の呼称を用い以下の議論を行う（太田圭2023他）。加曽利E V式の定義は、称名寺式の成立に合わせて加曽利E IV式が変化した土器群で、称名寺式期に継続した加曽利E系列の土器群ということになる。

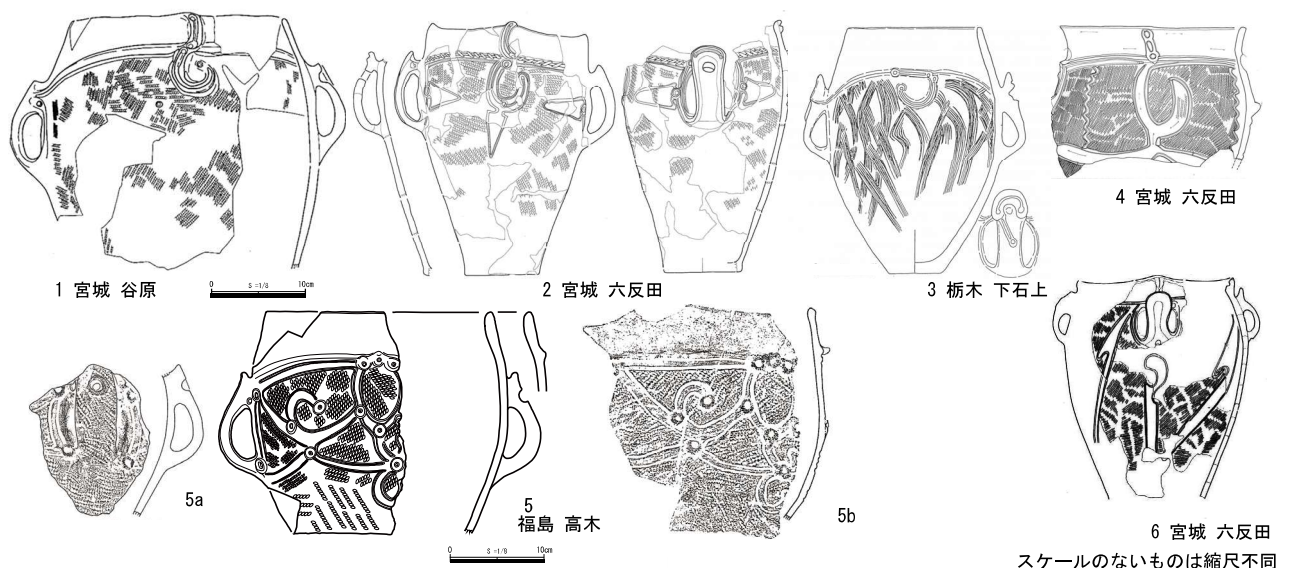
本論では、加曽利E系列の系譜はかなりの部分を縄文時代後期前葉の堀之内1式に継承しているということを述べることを目的とした。

1 終末期の出土の両耳壺について

第A図5は福島県本宮町高木遺跡出土の両耳壺である。

報告書では、拓影の破片資料として掲載された（5a・5b）。実見の結果、図のような復元が可能と判断し図化した。この個体を注目したのは、以下の内容による。

a. 両耳壺としてはかなり新しい時期の資料である。b. 両耳壺が中期加曽利E式に所属するの時期から持つ特色的な要素を具備している。c. 出土したのが福島県中通り地方の中央部分にあたる。

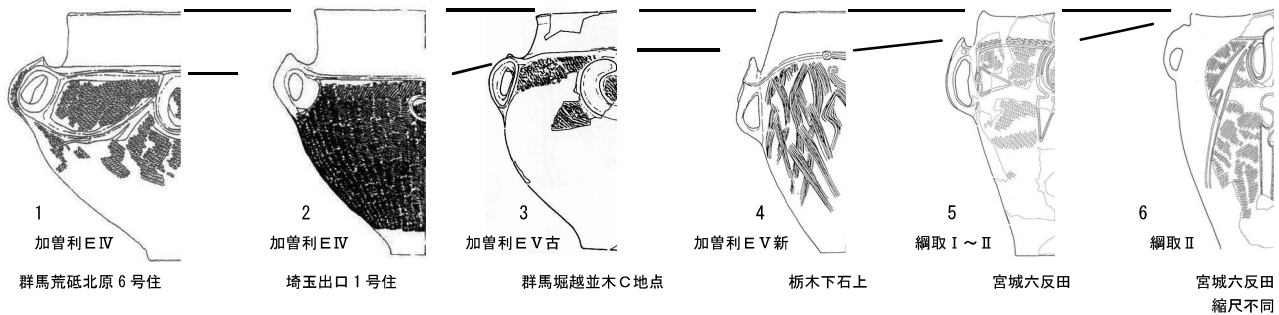


第A図 終末段階の両耳壺

（１）終末段階の両耳壺

第A図に、終末段階の両耳壺をまとめた。この時期の両耳壺が出土するのは、栃木・福島・宮城などである。この時期の両耳壺に見られる特徴は第A図1の宮城県山元町谷原遺跡の事例などを参考にすると次のような点が指摘できる。

- A. 樽型の器形を持つものが現れる
- B. 正面中央の舌状突起は、胴部の単位文の起点となる（中期の加曽利E式からの継承）。
- C. 中期以降の伝統として、無文部の口縁と平縁の特徴が崩れる。



第B図 両耳壺の器形の変遷

（２）両耳壺の器形の変遷

第B図に、中期末から後期初頭の終末段階の両耳壺の器形の変化をまとめた。中期末の両耳壺は、第B図1・2のように鉢状の器形が多い。口縁の無文部は直立する傾向にある。この段階で、舌状突起が成立していることが重要である。3の加曽利E V式段階になると、口縁の無文部の上下幅が狭くなり内傾する傾向にある。また、4など加曽利E V式中葉から後半段階になると、口縁部無文帯の区画が水平ではなく中央がせりあがるものが現れる。器形もやや縦長になるものが現れる。5の綱取I～II式の段階になると、把手の有無以外では、深鉢と変わらぬ形状となるものが多い。6の綱取II式段階の両耳壺は事例は極めて少なく例示した六反田遺跡が代表資料となる。この段階では、把手の有無のみで深鉢と変わらない器形となる。

このようにしてみると、両耳壺が加曽利E式から綱取式または堀之内式へ土器の変遷に大きな役割をなしていたと考えられるのではないかと考える。

2 栃木県・福島県の状況

予稿集では、栃木県・福島県の称名寺式平行期の状況を示した。そこにみられる多くの土器群は、上記両耳壺を含め加曽利E V式の変遷過程の中でとらえることができる土器群と考えた。

3 まとめ

加曽利E系列の土器群は、上記のように堀之内式の中に多くの影響をあたえているとみることができる。中期末には、関西の中津式または北白川C4式の影響を多く受け、関東地方においては称名寺式が成立する。称名寺式は、関東地方南部から周辺地域に分布を拡大するが、その拡大の先では各地で加曽利E系列の土器群が分布を拡大している。称名寺II式に至り称名寺式の拡大の勢いが止まるとともに、加曽利E系列につながる土器が分布を拡大する。その土器こそが、関東では堀之内式、東北南部では綱取式となるのである。

加曾利E式土器の再検討

加曾利E 系列の土器群（続）

・加曾利E 式の堀之内式への継承・
稲村晃嗣



Simmon 株式会社 西門文庫

4

両耳壺

千葉市愛生遺跡



2

加曾利E 系列の土器群①



千葉市愛生遺跡 1 号住居跡出土

3

加曾利E 系列の土器群②ー加曾利E 式の堀之内式への継承ー

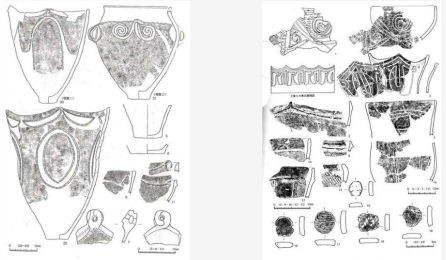


千葉市愛生遺跡
加曾利E 式

千葉市加曾利貝塚
堀之内式

4

加曾利E 系列の土器群③ 千葉市愛生遺跡 1 号住居跡出土



5

加曾利E 系列の土器群④

- ・1985 年称名寺式土器に関する交流研究会
称名寺式が成立することによって現れた加曾利E 式に見られる変化
- ・稲村が担当
- ・加曾利EIV 式の類型 A. 対向U 字交錯文 B. 渦文逆U 字交錯文 C. 併行垂下文類型
- ・これに次の変化 ①胴部文様の上下二帯化 ②単位文の生成 ③区画文の生成
④帯縄文化 ⑤下部文様連繋
- ・この会の、準備と記録集取りまとめの過程で称名寺式期に下る加曾利E 式を加曾利EIV 式の次の土器群ということで加曾利E V 式と便宜的に呼称していた
- ・当時の見解として、私自身称名寺式は後期の土器群という認識があり、称名寺式期にみられる加曾利E 系列の土器群は、後期の土器であるという認識であった

6

加曾利 E V 式土器

- ・石井寛氏が1992年、便宜的としながらも、加曾利E V 式という呼称方法を提案した。
- ・これまで、私は、若干の違和感を感じこの型式名を自分の論文などでは使用を控えてきた
- ・人別時期の後期に、加曾利E 式が続くことの違和感
- ・今回の発表のなかでは、私はこれらの土器群を加曾利E V 式という形式名で呼称していく
- ・多くの研究者の中に「加曾利E V 式・加曾利E 5 式」の型式名が浸透している
- ・「加曾利E V 式」に代わる型式名が提案されていない
- ・当該土器群に称名寺式という型式名を使う研究者も存在するが、土器の系統性を加味して考える場合には障害となる
- 加曾利E V 式の定義は、称名寺式の成立に合わせて加曾利E IV 式が変化した土器群で、称名寺式期に継続した加曾利E 式系譜の土器群ということになる。

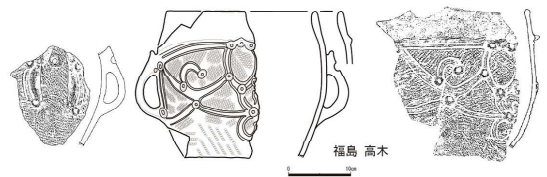
7

加曾利 E V 式土器に関する問題

- ・関沢類型に関して
- ・関沢類型と言われている土器群は、1985年の交流研究会では、加曾利E 系列の土器群としての明示的にはいたっていない
- 加曾利E V 式を構成する中核的な土器類型と再認識したほうが良いと考える
- ・網取式土器について
- ・栃木県で加曾利E V 式と網取式の併別は困難
- 江原英 2016「また北関東北東部域の加曾利E V 式では図形的文様表現をとらない粗製土器的な個体が更に増加すると共に、いわゆる網取E 式との区別が難しい個体群が増えつつある。」
- 加曾利E V 式に後継する土器類型ないしは加曾利E V 式後半そのものとする事も可能か

8

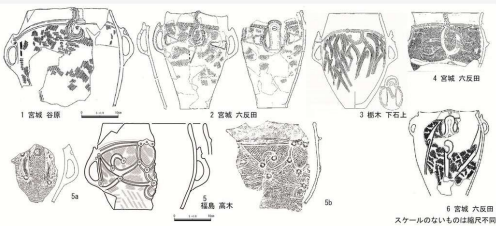
福島県本宮町高木遺跡 両耳壺



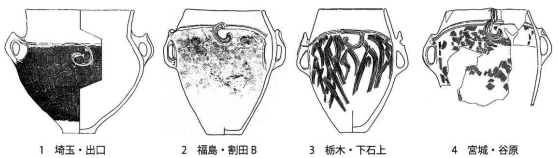
宮城県山元町谷原遺跡 両耳壺（SB52）



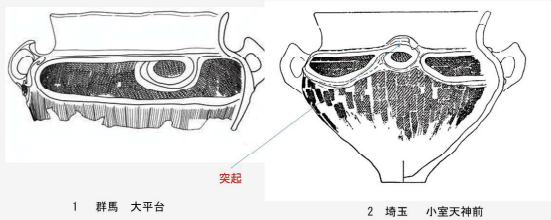
終末段階の両耳壺



両耳壺 4 例



両耳壺の基本形



両耳壺の基本形

- 特徴 1.正面中央に主文様
胴部正面に主文様を持ち、土器の正面がはっきりしている
把手を支えにして土器を抱えた場合、主文様が自分もしくは正対する人物に見えやすい位置にある
称名寺Ⅱ式併行段階では、器形が樽型になるとともに、把手がやや下方向に設置される
一それにより、主文様が自分もしくは正対する人物に、より見えやすい位置になり大きい主文様(単位文)が施される傾向となる
- 2.平縁
両耳壺の終末期直前に至るまで基本的に平縁である
平坦に覆う蓋・膜などの設置が考えられる

両耳壺の基本形

- 特徴 3.口縁部無文帯を持つ
ほとんどの事例に口縁部無文帯を持つ
両耳壺の終末期直前に縦位に添付文を持つようになる
それまでは、無文帯部は見えなくてもよい部分と認識されていたのではないかと
2に言う蓋は、布・紙・板などある程度柔軟性を持つ材質であった可能性
液体を保存し、頻繁に移動させる必要がある用途だったのではないかと
一酒や調味液などか
- 両耳壺の終末期直前に縦位に添付文を持つようになり、波状口縁となるものが現れることは、上記用途に変化が現れたことを意味するのではないかと
- 4.両耳(把手)の上下で文様帯区分
把手の上端から下端の幅の中に外観に意味があった
下端以下が、縦方向のモチーフや地文(縦位回転縄文や縦位の条縄文)になるのは、文様帯の区切れ目の認識
- 5.舌状突起の成立
加曽利EⅢ式期に堀之内式にまでつながる単位文の起点をなす舌状突起が成立した

両耳壺の基本形

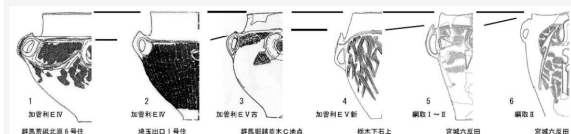
- 特徴 6.把手が耳状に跳ね上がる
耳状にはね上げた形状をなすものが多い
一把手上部まで被覆していた蓋状のものが下に落ち込むのを防ぐ用途か
把手の持ち方は、両手を把手の下面にあて親指を把手の環の中に入れるか、把手の上部にあてるとのいずれかと考えられる
一後者の場合、把手上部が跳ね上がっていったほうが安定して両耳壺を持ち上げることができる
- 7.把手の横位貫通孔は共通して大きく何かを通す意図が感じられる
●口縁に膜を被った場合の、紐
●両耳壺を両手で持ち上げた場合の左右の手の親指

鈴木徳雄氏指摘の注目点

称名寺式前後の土器の存在形態と変化・土器系統の存在形態と器種の推移

- 関東においては、称名寺式期に入ると注口付浅鉢が安定して組成する
両耳壺の減少傾向とは逆の現象を辿るように見える。
- 後期に発達する注口土器は、同時に共食する場合においても注水の過程が経時的な過程を伴うものであり、注水にかかる順列を伴った共食の過程を現わすなど、器種の形成に伴う土器に関わる社会的な行為に変化が生じていることは中期末から後期前半期の間の変化を考える上では注目しておくべき点である。
- 両耳壺にみられる“器種行為”は、調理した内容物を、両耳壺ごと場所を移して共食に供するような、共食行為の過程を想起することができる

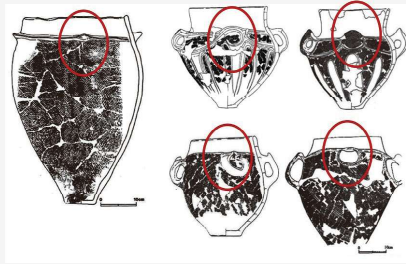
両耳壺の単位文類型の器形の変化



両耳壺の単位文類型の器形の変化

中期末の両耳壺は、1・2のように鉢状の器形が多い
口縁の無文部は直立する傾向にある。
この段階で、舌状突起が成立していることが重要
3の加曽利EⅤ式段階になると、口縁の無文部の上下幅が狭くなり内傾する傾向にある
また、4など加曽利EⅤ式中葉から後半段階になると、
口縁部無文部の区画が水平ではなく中央がせりあがるものが現れる
器形もやや縦長になるものが現れる（樽型の器形となる）
5の網取Ⅰ～Ⅱ式の段階になると、把手の有無以外では、深鉢と変わらぬ形状となるものが多い。
6の網取Ⅱ式段階の両耳壺は事例は極めて少なく例示した六反田遺跡が代表資料となる。
この段階では、把手の有無のみで深鉢とかわらない器形となる。

両耳壺由来の舌状突起



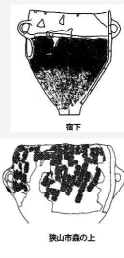
20

両耳壺由来の舌状突起

- ・加曽利EⅤ式から次の段階の土器に推移するのに重要なのは1に示した砲弾状の器形を有する深鉢形土器である
- ・舌状突起の田米は、加曽利EⅢ式期の横帯文の中央渦文上端の突起が退化し残存したものであると考えられる
- ・この突起は、加曽利EⅣ式からEⅤ式においても、単位文の起点として機能することになる
- ・この突起が単位文の起点となり、加曽利EⅤ式が堀之内式（網取式）に変化しても単位文の起点として機能し続ける
- ・さらに言えば、舌状突起のはじまりは、加曽利EⅢ式のキャリバー型土器の口縁部文様帯の渦文上端の突起であり、それが縄文後期となっても連続と文様の起点となり続ける

21

両耳壺の基本形からの逸脱



・基本形からの逸脱を見ると基本形が見えてくる

宿下 把手の位置が間違っている
口縁の平縁は維持されている

森の上 全面に地文（縄文）が施されている
平縁は維持されている

22

両耳壺各類型 加曽利EⅢ



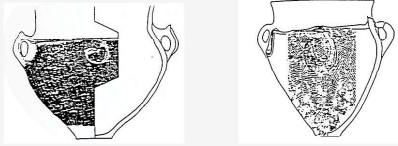
器面下部に縦方向の地紋ないし文様を描くものが多い

両耳壺の各類型 加曽利EⅢ～Ⅳ



24

両耳壺の単位文類型 加曽利EⅣ～EⅤ

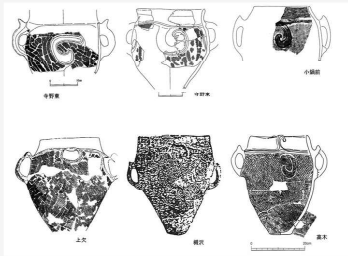


25

両耳壺の単位文類型 加曽利EⅤ

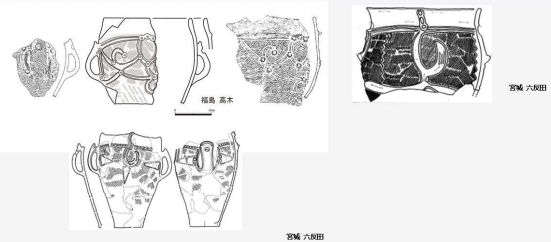


両耳壺の単位文類型 加曽利EⅤ～綱取Ⅰ



27

両耳壺の単位文類型・横帯文類型 綱取Ⅰ～Ⅱ



28

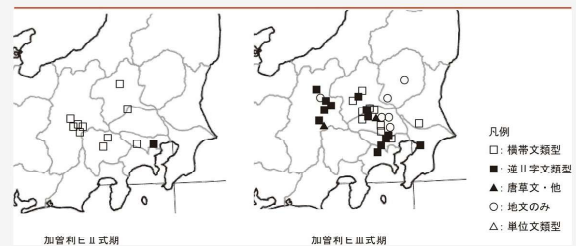
両耳壺の単位文類型 7 綱取Ⅱ



宮崎 六郎田

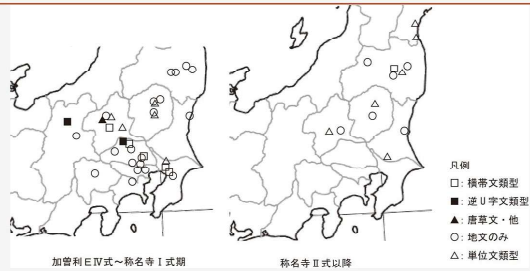
29

両耳壺の分布①



30

両耳壺の分布②



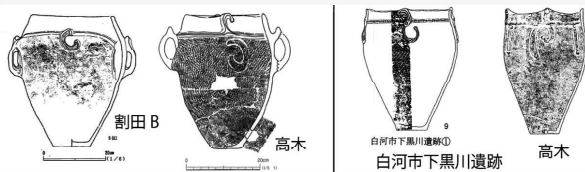
31

両耳壺の深鉢化 1



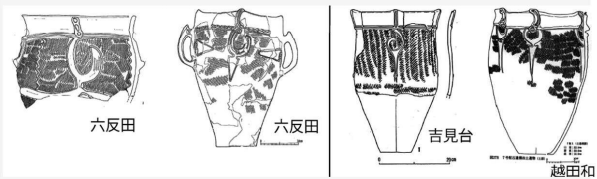
32

両耳壺の深鉢化 2



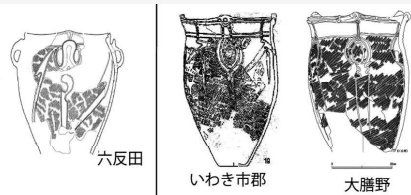
33

両耳壺の深鉢化 3



34

両耳壺の深鉢化 4



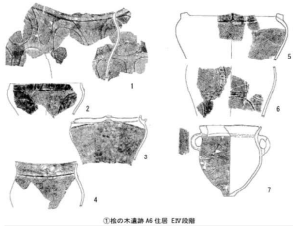
35

両耳壺の深鉢化 5



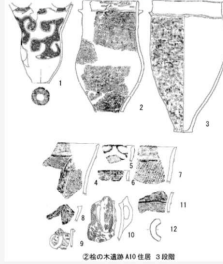
36

北関東の状況 1



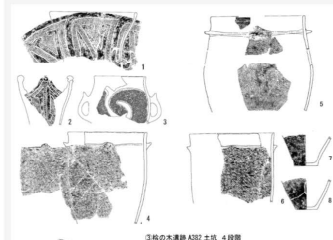
玉抱文の加曽利EⅣ式（①～①）に両耳壺（①～⑦）が伴う。この段階には、砲弾状の深鉢は伴っていないが、口縁部無文帯を広くとる器形が存在している（①～④）ことが注目される。

北関東の状況 2



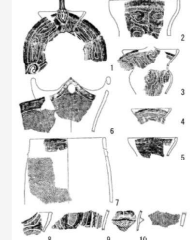
A10住居は3段階の資料と考えられるが、この段階には舌状突起が施される砲弾状の器形の深鉢が存在している（②～③）。いわゆる牛銚式の主たる分布域の外にある地域でこの器形が成立しており、砲弾状の器形は加曽利E系列の中で生成されていることが注目点である。両耳壺（②～⑩）も存在している。

北関東の状況 3



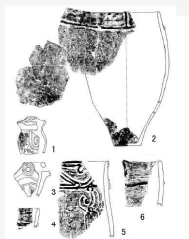
A382土坑は4段階の資料と考えられる。称名寺式も伴い（③～①・②）、安定して舌状突起を有する砲弾状の深鉢（③～⑥）も存在する。両耳壺には明確に渦文を有する（③～③）。渦が大形で、モチーフ上端が開放されていることが特徴である。

北関東の状況 4



5段階の資料と考えられる

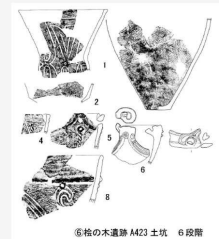
北関東の状況 5



6段階の資料と考えられる

栃木県域においては、A291土坑⑤～②の様に砲弾状の深鉢の地文に縄文が採用されないものが増加する傾向がある。

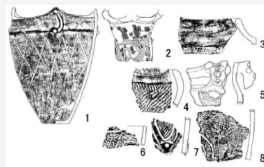
北関東の状況 6



6段階の資料と考えられる

栃木県域においては、A291土坑の資料よりは新しく7段階に下る可能性もある。

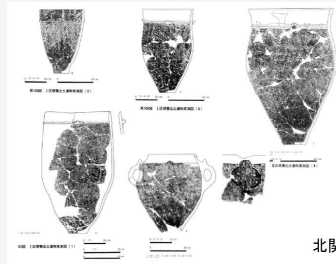
北関東の状況 7



⑦ 松の木遺跡 B596 土坑 7 段階

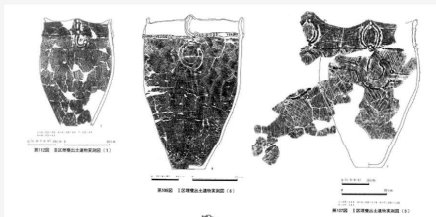
B596は7段階の資料と考えられる。
B596土坑⑦-1のような地文に格子目状沈線文があることは注目したい

北関東の状況 補足 1



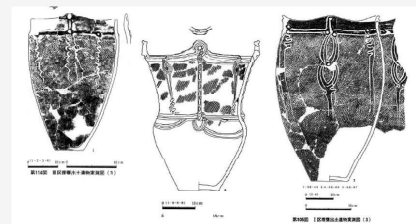
北関東の状況 1（荻ノ平遺跡より）

北関東の状況 補足 2



北関東の状況（荻ノ平遺跡より）

北関東の状況 補足 3



北関東の状況（荻ノ平遺跡より）

北関東の状況 補足 4



北関東の状況（荻ノ平遺跡より）

南東北の状況 1



264住は太木10式中の新から新段階の資料と考えられる。加曾利EⅡ式併行とみる。縄文の隆帯が3条になる部分が見られる。

南東北の状況 1-2（参考資料）



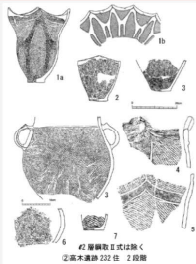
香取市吉原三王遺跡 J-4号土坑

南東北の状況 1-3（参考資料）



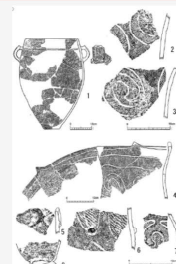
宮城県仙台市 下の内遺跡 S17住居

南東北の状況 2



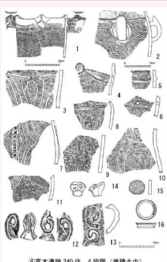
232住は2段階の資料と考える。②-1a は岩坪タイプの加曽利 E V 式である。両耳壺が存在する (②-4)。②-5は、牛埴式である。様相としては加曽利 E V 式に在地系の牛埴式が伴っていると思われる。

南東北の状況 3



229住居は3段階に相当すると考える。称名寺式 (③-2-3)、両耳壺 (③-1)、罌沢類型 (③-4)、対向 U 字文の E V 式 (③-6) など殆ど北関東の加曽利 E V 式と変わらない。

南東北の状況 4



240住は4段階の資料と考えられる。称名寺式に加曽利 E V 式が共存する。両耳壺も出土する (④-2)。砲弾状の器形の深鉢 (④-1) も存在する。

南東北の状況 5



260住は5段階の資料と考えられる。
称名寺式と加曽利 E V 式が混在している
⑤-3の砲弾状の深鉢が特徴的で逆 U 字状の添付文が施される (牛埴式由来か)

南東北の状況 6



282住は6段階の資料と考えられる。
⑥-1には地文に斜交する条線が採用されている

⑥高木遺跡 282 住 6 段階

南東北の状況 7



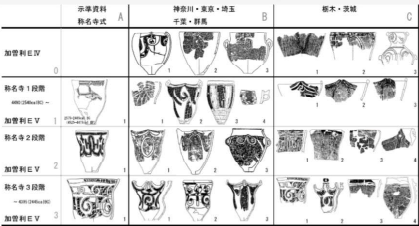
175住は7段階の資料で、⑦-1aには英和語（第7図⑧-8-4）に由来する漢文が単位文として残存し縄文手法で施文される。

175住には称名寺式の典型例はない
称名寺式はこの時期には退潮し関東地方との移行関係はとらえづらくなる

称名寺式（1-7）に並行する北関東・南東北の土器様相は称名寺式・牛
埴式以外には加曾利E V式の混在の混在であることが確認されている

→はばたき推移を促していると思われる

関東から南東北の状況①



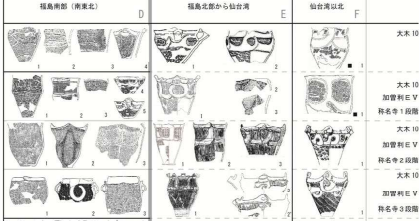
陶耳壺は、南関東では、3
段階頃まで見ることができ、
6・7段階の称名寺Ⅱ式の段
階にはほとんど見ることが
できない。
→注口付き浅鉢は散見さ
れる

関東から南東北の状況②



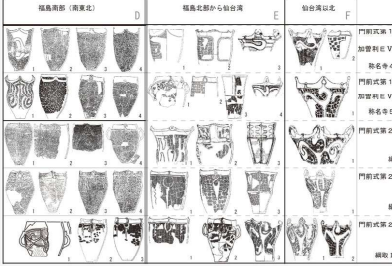
陶耳壺は、栃木・茨城など
北関東では称名寺Ⅱ式にも
あるが漸減する
南関東では、称名寺系土
器が加曾利E系土器を凌駕
するようになるが、栃木・茨
城では称名寺Ⅱ式にいたる
まで加曾利E系列の土器が
色濃く残る
加曾利E系列の土器の終焉
は各地で異なり、北に行くほ
ど新しい時期にまで残存す
る

南東北以北の状況①



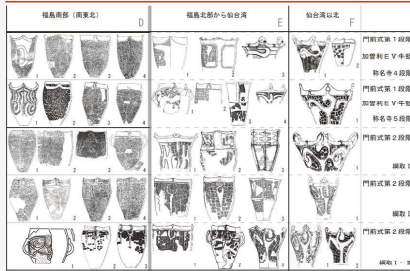
仙台湾周辺での大木10式
土器の終焉と関東の土器群
との対比は、また困難な部
分があるが、加曾利E V式
（E-1-2-3）とみられる資料
が大木10新段階の資料と
ともに出土している。
→山内資料（E-3-3）は称名
寺式第3段階頃に比定され
よう

南東北以北の状況②



仙台湾周辺での陶耳壺の
出現は、関東地方北部から
東北地方南部のような加曾
利E V式からの変遷を経過
しておらず唐突に出現する
→編取Ⅰ終末の時期に加
曾利E Vの影響が仙台湾に
及んだか、さらに袖摩式の
区画内にX字状文を施す土
器をこの時期に生み出した
可能性がある

南東北の状況②



仙台湾周辺での両耳壺の出現は、関東地方北部から東北地方南部のような加曽利EⅤ式からの変遷を経過しておらず唐突に出現する

→網取Ⅰ終末の時期に加曽利EⅤの影響が仙台湾に及んだか、さらに桶座式の区画内に十字状文を施す土器をこの時期に生み出した可能性がある

南東北の状況 網取式について①

網取Ⅰ式 網取貝塚C地区第3群土器
関東地方の土器型式と対応すれば称名寺式期となる

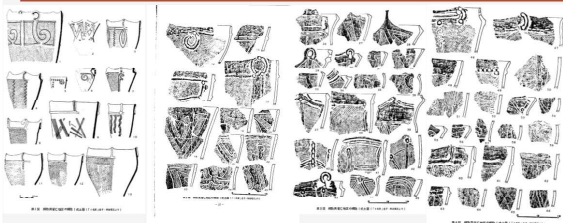
網取Ⅰ式は網取Ⅱ式に変化する

網取Ⅱ式 網取貝塚第四地区
関東地方の土器型式と対応すれば堀之内Ⅰ式期となる

「近時、関東北においても、網取Ⅰ式土器に関連する資料が増えているのは喜ばしいが組成をなす土器には、私は疑問をもっている。なぜならば、網取Ⅰ式土器の成立は大木9式土器に直接の要因があるのではなく、次の大木10式土器に求められるからである。大木10式土器に相応する関東の土器型式は、なお不明なのである。」

馬目順一1977『いわゆる『網取貝塚C地区』の土器について』『考古』19: 35-46

南東北の状況 網取式について② 網取Ⅰ式



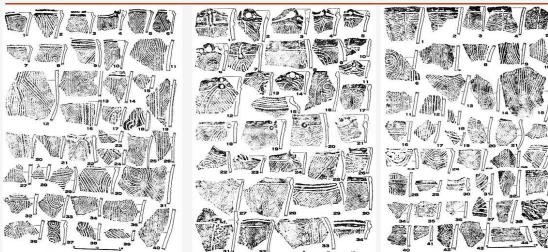
馬目順一1977『いわゆる『網取貝塚C地区』の土器について』『考古』19: 35-46

南東北の状況 網取式について③ 網取Ⅱ式



馬目順一1980『網取貝塚第四地区の土器について』『考古』19: 35-46

南東北の状況 網取式について③ 網取Ⅱ式



馬目順一1980『網取貝塚第四地区の土器について』『考古』19: 35-46

南東北の状況 網取式について④ 網取Ⅱ式



馬目順一1980『網取貝塚第四地区の土器について』『考古』19: 35-46

南東北の状況 網取式について⑤



(上) 下大越貝塚(梅林)の網取Ⅰ式土器

(下) 片寄貝塚の中期末の土器

源三郎 下大越貝塚(梅林)の網取Ⅰ式土器(上)・片寄貝塚の中期末の土器(下)
(「土器の考古学」)

原田 龍一 1977 『わが国土器の考古学』 東京: 東京大学出版会

南東北の状況 網取式について⑥



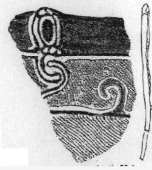
丁葉県内出土の網取式土器

南東北の状況 網取式について⑦

省略

新潟の後期初頭編年

南東北の状況 網取式について⑧



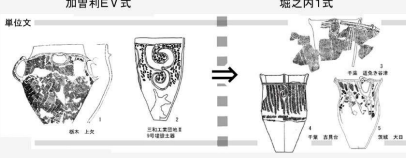
福島県飯野町和台遺跡
提示の福島県以北の7段階の資料はや実際はやや新しく当該期の資料は今のところ少ないと見えます
このような資料が増加していくものと思われます

南東北の状況 補遺



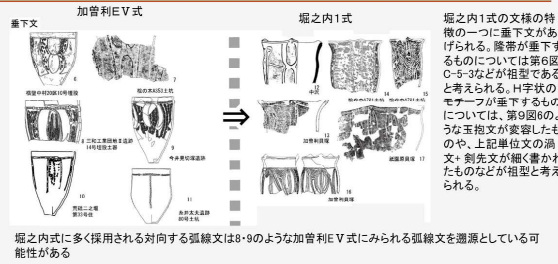
福島県大熊町上平A遺跡
福島県の堀之内Ⅰ式前半の資料です

堀之内Ⅰ式への継承①

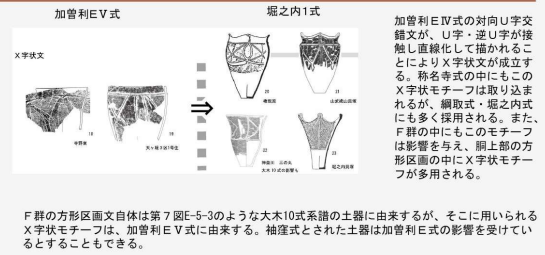


堀之内Ⅰ式土器をみると、初期に4単位、のち3単位の波状口縁が見られ、その波頂下に単位文が施される場合が多い。
網取式、堀之内に多用される渦文の由来は、加曾利EⅢ式から続く周耳堂の正面中央の渦文であると考えられる。

堀之内1式への継承②



堀之内1式への継承③



両耳壺に関連する最新段階の土器群



収束へ

- ・加曾利E系列の土器群は、上記のように堀之内式の中に多くの影響をあたえているとみることができる。
- ・縄文時代中期末には、関西の中津式または北白川04式の影響を多く受け、関東地方においては称名寺式が成立する。
- ・称名寺式は、関東地方南部から周辺地域に分布を拡大するが、その拡大の先では各地で加曾利E系列の土器群が分布を拡大している。
- ・称名寺Ⅱ式に至り称名寺式の拡大の勢いが止まるとともに、加曾利E系列につながる土器が分布を拡大する。
- ・拡大の範囲は、東北地方南部から関東地方に至り、その土器こそが、関東では堀之内式、東北南部では網取式となるのである。

→加曾利貝塚発掘100周年との関係で
そのころは？

栃木県槻沢遺跡の事例①（1935・36年の論文にて）



栃木県槻沢遺跡の事例②（1935・36年の論文にて）



栃木県槻沢遺跡の事例③（1935年の論文にて）

第一類土器
阿玉台式と説明

第二類土器
加曾利E式と説明

ABC
第二類土器
D
第三類土器
CDは
写真の誤りで
逆転

栃木県槻沢遺跡の事例④（1935・36年の論文にて）

第三類土器

栃木県槻沢遺跡の事例⑥（1935・36年の論文にて）

第四類土器

栃木県槻沢遺跡の事例⑦（1935・36年の池上論文にて）

次に土器に就いてであるが、土器を分ちて四種類に區別して述べた（こまごまのべた）。即ち第一類土器は所謂阿玉台式、第二類土器は加曾利E式、第三類土器は加曾利E式よりも新しいと称せられるもの、第四類土器は堀之内式土器等の呼称を持って、主として南工上より提唱されるものに稍々同定される土器等を挙げることが出来た。形態は、第一、第二類土器は、口縁部の張出した大形の土器が多く、把手を有する場合が多い。第三類土器は、口縁の開いた深鉢形を特徴とする。第四類土器は器形の変化に富み、甕、鉢、浅鉢、土版形等に分る。

紋様は、第一、第二類土器は隆起線紋によって、主として口縁部に装飾を見る。第三類土器は主として磨削の手法を行って紋様の効果をあげている。第四類土器は、沈線紋磨削り紋等が主体となり、之れに充填紋を以て甚だ複雑な細い手法を行っている。

地紋とも云ふべき縄文は、第一、二、三類土器にあっては、比較的粗く、縦に附されてゐる。第三類土器に於ては、縄紋粒子比較的小さく、方向は縦に走っているのが特徴である。彩色を行った赤塗りの土器を少量ではあるが出土している。

製作は何れも比較的良好であるが、特に第四類土器は精巧なるものが多い。

此等の土器を標準として、関東貝塚の編年学的研究の結果に就いて比較研究を行へば、第一、第二、第三類土器は中期のものに、第四類土器は後期のものに稍々同定せしめられるであろう。

栃木県槻沢遺跡の事例⑧（1935・36年の論文にて）

要約

土器 四種類に類別
第一類土器は所謂阿玉台式
第二類土器は加曾利E式
第三類土器は加曾利E式よりも新しいと称せられるもの
第四類土器は堀之内式土器等の呼称を持って、主として南工上より提唱される所のもの

これらの土器を標準として、関東貝塚の編年学的について比較研究を行へば、

第一、第二、第三類土器は中期に、

第四類土器は後期に同定される

山内清男氏が示した編年表①

1929年作成の編年表

伊東信雄 1977 山内博士東北縄文土器の成立過程 考古学研究第24巻第3・4号

山内清男氏が示した編年表②

関東地方	陸 前	陸 奥
三 戸 式(縄紋以前)	榎木 1 (縄紋以前)	
子母口式(同)		
○ 茅 山 式(縄紋絳)	○ 榎木 2	
○ 蓮 田 式	○ 大木 1, 2, 室瓦	○ 円筒土器下層式(中磨具塚 1)
○ 諸 磯 式	○ 大木 3, 4, 5	(運津)
○ 阿玉台式(縄紋絳)	● 大木 7	○ 円筒土器上層式(中磨具塚 2)
● 加賀利王式	● 大木 8	■ (中磨具塚 3)
● (未命名)	● 大木 9, 10	● (中磨具塚 3 b 材料少蔵)
○ 堀之内式	○ (未命名)	○ (未命名, 相内第一地点上層)
○ 加賀利 B 式	○ (未命名)	○ (未命名, 調査材料少蔵)

山内清男 1930 斜行縄紋に関する二三の観察 史前学雑誌 第二巻第三号

山内清男氏が示した編年表③

[illegible]

() 加害者と加害者の名を附いて署名し、捺印する。

山内 清男 1936 「日本考古学の秩序」 『ミネルヴァ』 第1巻 第4号: 1-10.

山内清男氏が示した編年表④

[illegible]

註記 1. この表は複製のものであって、後日訂正増補する筈です。
2. (+)印は相当する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (X)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と関連する十指を用いた遺跡を

山内清男 1937 縄紋土器型式の細別と大別 先史考古学 第一巻第一号

おわり



22